

主体的に英語を学び続ける子どもの育成を目指して

1 外国語活動・英語科における「一人一人が問いをもち追求する姿」

- 今日は友だちにパンフレットを使って松江のよさを伝えました。1回目は相手の顔が見られなかったし、"OK?"なども言えなかったけど、2回目はちゃんと見られて、"OK?"もちゃんと聞いてよかったです。外国の人に伝えるときにはもっと大きな声で分かりやすく伝えたいです。(児童A)
- 私たちは色紙に漢字を書いてその漢字について紹介しました。パーフェクトに伝えることはできなかったかもしれませんが、私の言うことを真剣に聞いて下さって「外国の方と自分の言いたいことを英語で話せているんだ」ということを感じる事ができました。(中略) 外国の方と話せている喜びもあつたし、日本の文化を分かってもらえて、それについて考えて下さってうれしかったです。(生徒B)
- 私たちはジブリについて紹介しました。私自身ジブリがとても好きなので外国の方に気に入ってもらえてとてもうれしかったです。外国の方を前にすると自分が使っている言葉や文がこれでいいのか、とても不安でしたが、伝わっているようだったので、自分の言葉が伝わるのはとても感動する出来事でした。(生徒C)
- 僕はアメフトやNBA、メジャーリーグなどをよく見るのですが、インタビューやアナウンサーの解説などを聞いていると内容が3分の1から半分くらいはわかったので、これも学習の成果かなと思います。(以下略) (生徒D)

児童Aは1回目の会話で自分ができなかった点を自覚し、2回目の会話ではそれができたことへの喜びを感じている。そして、今後の英語学習への課題意識をもち、取り組む意欲ももっていることが分かる。また、生徒Bと生徒Cのふりかえりは外国の方に日本の文化について紹介した時のものである。どちらの生徒も自分が伝えたい内容があり、それを伝える手段として英語を用いている。その結果として、流暢な英語ではないが、外国の方と英語でコミュニケーションを図ることができたときの感動や喜びを感じている。生徒Dは中学校3年間の英語学習を振り返って感じたことを記している。自分の学習の成果を実感するとともに、英語を自分の日常生活と結びつけてとらえていることがうかがえる。

伝えたいことがあれば、つまり「思い」があれば、それを表現するために必要な単語、文法、表現方法を知りたくなる。この「知りたい」という思いが主体的に学ぼうとする原動力となる。主体的に学ぼうとする姿勢が芽生えてくれば、一方的に与えられた課題や教師の発問からではなく、子どもの内面から問いが生まれる。したがって、本学校園外国語活動・英語科では「問い」を児童・生徒が英語学習において自分の目指す姿を思い描き、そこに向かっていこうとする際に芽生える疑問や欲求であるととらえている。

学習者は問いを解決しようと学びを深めていく。その問いを解決できたときの喜びが次の学びへとつながる。このような学びの過程で生じた問いを解決するための試行錯誤を通して、確かな力が子どもたちの中に蓄積されていく。そして生徒Cのように自分のくらしと結びついた英語学習への意欲も継続的な学習を可能とする要素の一つである。このような姿が外国語活動・英語科で願う「一人一人が問いをもち追求する姿」であり、このような経験をたくさん積んでいくことが英語という言語に対する学びのさらなる原動力となり、主体的に英語を学び続ける子どもの育成につながると考える。そこで外国語活動・英語科では「一人一人が問いをもち追求する姿」を次のように定義した。

- 様々なことがらに関心をもって、自分の思いを広げたり深めたりする姿
- 課題意識や目的意識をもち、外国語活動や英語学習を通して自己の伸長を図る姿
- 学んだことをその後の学習や生活にいかしている姿

2 「一人一人が問いをもち追求する姿」を求めて

一人一人が問いをもち追求する姿を求めて、外国語活動・英語科では以下の手立てを考える。

- 子どもが「思い」を抱くことのできる教材の工夫
- 「伝えたい」「知りたい」という気持ちをくすぐる指導の工夫
 - 相手の立場や考え方を尊重しながら自分の考えを表現することができる学習環境
 - 気づきが生まれる学び合い
 - 明確な指導目標のあるコミュニケーション活動の充実
 - 様々なタイプの学習者にあった学習方法の提示
- 言語活動の目標を明示し、その目標への成長を子どもが実感できる評価の工夫

子どもがそれぞれの「思い」を抱くことができるような教材との出会いが必要である。「知りたい」「伝えたい」という気持ちをくすぐるような仕掛けを授業の中に盛り込み、他教科との関連があったり、自分との関わりが深いものであったり、心が動く教材との出会いを教師は設定する必要がある。

また、単元を構想する際には、相手意識や目的意識をしっかりとって活動できるような工夫を行い、コミュニケーション活動の充実を図らなければならない。さらに、気づきが生まれるような学び合いの場を設定することも教師のはたらきかけとしては欠かせない。自発的な問いに対して子ども自ら学び合いで気づきを得て学びを深めるのである。しかし、主体的な学びの意欲があっても学ぶ手段がなければ継続的な学びとはならない。学びの歯車を回すのが「知りたい」という気持ちであるならば、学習手段は歯車そのものである。そこで、学習者にあった学習方法を提示することも教師のはたらきかけとして行っていきたい。

最後に、この学びのサイクルを次の学びへとつなげる役目を果たすのが評価である。外国語活動では毎時間「ふりかえり」（自己評価）の時間を設定し、自己や他者を見つめる中で個々のよさや気づきをより広げるふりかえりの在り方を模索している。子どものふりかえりにもあったように、自分の言いたいことを伝えることができうれしい、相手の思いや考えを知ることができてうれしいという自分の成長が感じられるようなふりかえりが次への学びへの意欲にもつながり、継続的に学び続けることを可能にすると考えている。

（文責 高田 純子）

【参考文献等】

- ・英検 英語情報（2013 12・2014 1月号）
- ・知的好奇心を刺激し、自ら学ぶ姿勢を育てる ～宮城県・仙台市立高森中学校